

16年を経過して再発をみたアダマンチノームの1例*

京都大学医学部外科学教室第2講座 (指導: 青柳安誠教授)

劉 楓 橋

〔原稿受付 昭和33年6月2日〕

A CASE OF ADAMANTINOMA OF MANDIBULA SHOWING RECURRENCE 16 YEARS AFTER THE OPERATION

by

FENG-CHIAO LIU

From the 2nd Surgical Division, Kyoto University Medical School.
(Director: Prof. Dr. Yasumasa Aoyagi)

The patient is a 47-year-old man, who 16 years previously was operated upon for an adamantinoma of the mandibula (partial resection of the bone including the tumor). He had been free of symptoms until 3 years ago when there developed in the same region where the former tumor was removed, painless swelling, the size of an egg of a pigeon, which was punctured and evacuated 1-2 times annually.

On admission, the tumor was thought to be a salivary cyst, but the histological specimen of the tumor revealed an adamantinoma.

It may be conjectured that the recurrent tumor is either due to the development of neoplastic cells remained which can only be confirmed by microscopy or to that of the aberrant germ cells elsewhere other than the bone.

緒 言

われわれは此の度、16年を経過して再発を来した珙瑯腫の治験例を経験したので報告する。

症 例

患者: 木○光○ 男子 47才。

主訴: 左側口内底部の無痛性腫瘍

現病歴: 16年前本院外科で左下顎部の珙瑯腫の診断の下に、剔出術を受け全治退院した。その後何らの症状もみられず経過していた所が、約3年前より左下顎部に鳩卵大の無痛性腫瘍が出来ているのに気付き、某医師により穿刺を受け、淡黄、透明な液が少量得られたが腫瘍は少しく縮小したのみでやはり存在し、爾来1年に1~2回程度穿刺を受けて来たが、腫瘍は穿刺

のみでは消失の見込みがないので再び本院を訪れたものである。

既往症: 8才に腸チフス、30才に左下顎部珙瑯腫で手術を受けた。

家族歴: 特記すべき素因は認められない。

全身所見: 体格中等、栄養良好、脈搏数77、血圧最高150mmHg、最低100mmHg、呼吸数20、胸部、腹部四肢異常所見を認めず、赤血球数582万、ザリー110%、白血球数5,200。中性球64%、好酸球1%、リンパ球35%、単球0%、尿所見ではウロビリノーゲンが弱陽性である他に、異常所見はみられなかつた。出血時間は2分5秒であつた。

局所々見: 左下顎部で第1小白歯の部より下顎関節の部迄下顎骨欠損があり、欠損部に一致して鳩卵大の腫瘍を蝕れる。被覆粘膜は外見上健常で、腫瘍は境界鮮明、且つ底部とはよく動き、粘膜及び皮膚とは癒着

* (第347回・京都外科集談会) 昭和33年5月

は認められない。硬度は一部やゝ硬い所があるが、全体として弾力性軟で、波動が立証出来る。非圧縮性で、羊皮紙様捻髪音は認められなかつた。所属リンパ節の腫脹は認められず、局所の体温上昇、発赤、舌の萎縮乃至運動制限及び口臭はすべて認められない。

レ線像では腫瘤の陰影、石灰沈着は認められ、左下顎骨の欠損が認められる。

手術所見：局所浸潤麻酔の下に、前回手術瘢痕に平行に約8cmの皮膚切開を加えた。皮下脂肪組織の發育は良好で、前回の手術により瘢痕化している結締組織を切除して腫瘤表面に達した。腫瘤表面は主として大部分が結締組織によつて覆われていて、これを鋭的に周囲から剝離した。途中穿刺によりca. 7ccの褐色、漿液性やゝ濁独した液を得た。口腔粘膜とは癒着なく、粘膜を損傷することなく完全に剔出した。

標本：大きさ $3 \times 2 \times 2$ cm, 囊腫状の腫瘤で壁は薄く結締組織様である。組織学的には、Adamantinomであつた。

考 按

本症例は珐瑯腫が16年も経過した今日に再発を来したとは想像もつかず、前記の局所々見より考え合せて入院当時は、唾液腺囊腫と診断されたものである。珐瑯腫が斯くの如く長年月を経て再発をみた報告は少ない。

珐瑯腫は大別して囊腫性珐瑯腫と実質性珐瑯腫との2種にするが、屢々両者が合併して来ることもある。われわれの症例は前者の方に属するものと考えられる。珐瑯腫には特異の細胞群があつて、その周囲に多少の結締組織がある。この細胞群の基底の細胞は歯牙の珐瑯細胞に一致し、円筒状でその内部に於ては細胞は骰子形又は不規則な形を呈する。囊腫性珐瑯腫はその中に内腔を有し、実質性のものは内腔を有しない。時には細胞群の中に發育不全の歯牙をみることもある。この腫瘍は先天性のもので成人の下顎骨に発見される

のが常である。転移は作らないが、再発をすることもある。囊腫性のものは実質性のものに比べて發育が急激で、時には巨大となることもある。囊腫性のものが実質性のものに比べて圧倒的に多いのは、実質性のものが古くなると囊腫性になる傾向がある為だといわれている。

大竹等は珐瑯腫52例について、統計的に調べ、この疾患は男性に多く、平均年齢は男30才台、女20才台の者が多数で平均年齢26才、自覚乃至は発見されてから来院迄の年数は平均4年6ヵ月、発生部位は下顎部に多く、手術は下顎骨の部分切除、下顎片側切除、一部削除搔爬等を行い、39例中3例の再発を報告している。顎骨以外の珐瑯腫の報告としては、脳下垂体に発生したもの、或いは脛骨に原発した例も報告されている。

たゞこの症例で再発の基本となつたものは何ものであるかが問題であろう。下顎骨の部分切除をする際に顕微鏡的の腫瘍細胞が局処組織内にこぼれ落ちて生長したものか、或いは下顎骨内に発生したものとは全く関係なく、骨以外にこのようなKeimが迷入してそれが發育したものかなど色々考えられるが果してどのようなものであろうか。

結 語

唾液腺囊腫の診断の下に剔出した標本が、16年を経過して再発をみた珐瑯腫であるという稀有の治験例を報告した。

文 献

- 1) 大竹正敏他：Enamel 上皮腫52例の総合的觀察，al, 日本齒科医師会學術會議會誌，87, 1950, 昭26
- 2) 大沢寛，加藤隆，Adamantinom 症例及びその統計的觀察，耳鼻臨床，49, 1, 29, 昭30, 3) 伊藤明：顎骨珐瑯腫11例の觀察，日本外科学會雜誌，43, 5, 635, 昭17 4) 齊藤隆吉：珐瑯質を形成せる珐瑯上皮腫の1例，口腔病學會雜誌，17, 402, 昭18
- 5) 小野克己，鈴木一：単房性珐瑯上皮腫の1例，臨床齒科，37号. 26, 昭32.

